

良質・良食味米安定生産・出荷のための栽培技術  
—産米のタンパク質含有率低下、売れる米づくりを目指して—

## Ⅱ

# 令和7年の水稲(もち米)の生育経過について

全道総括編

## 1 令和7年の気象経過と作柄状況

## 2 作柄の概況

## 3 令和7年産米の特徴

## 4 生育の特徴

## 5 令和8年に向けて

執筆：北海道農政部生産振興局 技術普及課 上川農業試験場駐在  
上席普及指導員 小 泉 滋 二（農業革新支援専門員）



## 1 令和7年の気象経過と作柄状況

### (1) 農耕期間(4~10月)の気象経過(名寄市)

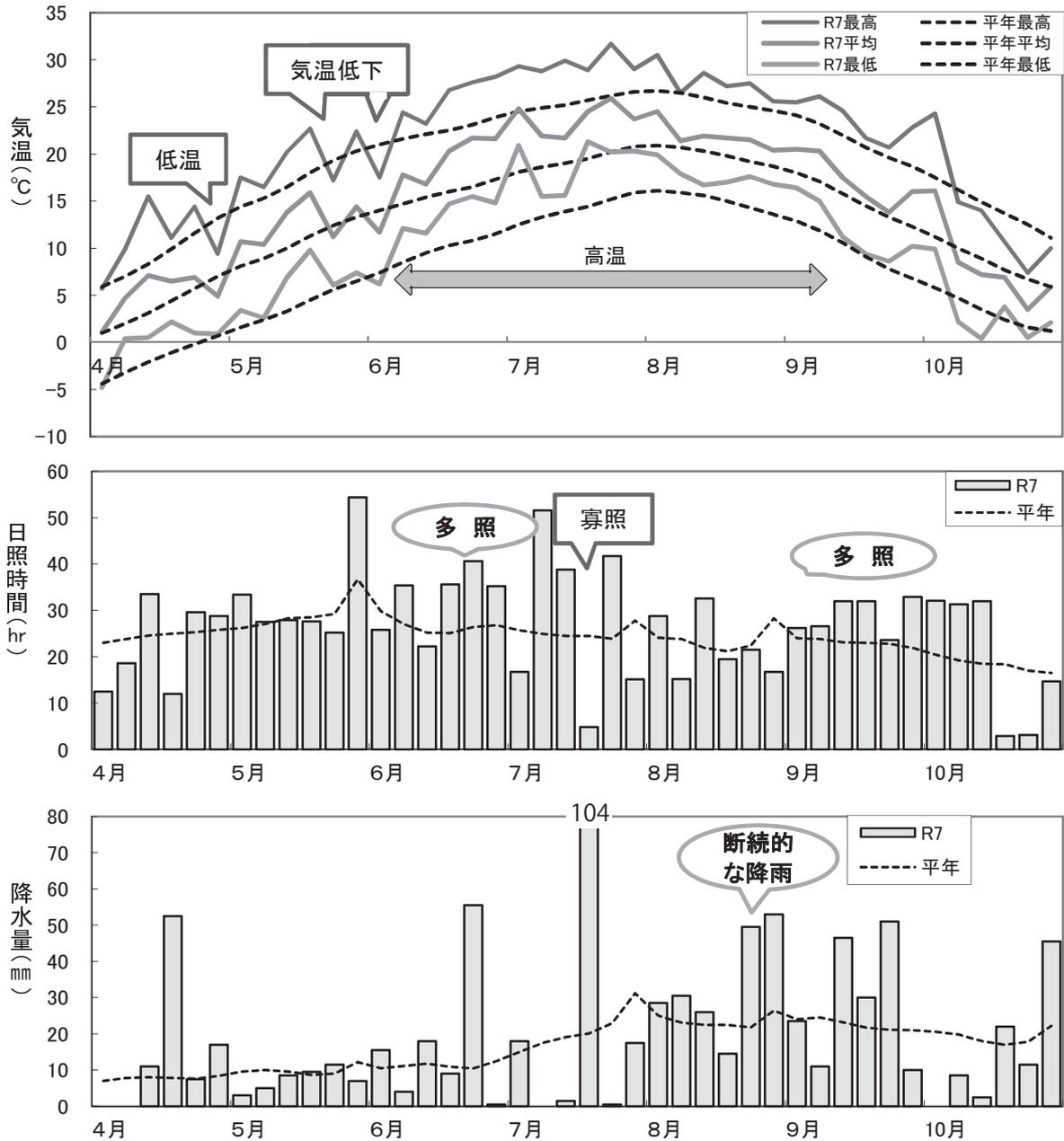


図1 令和7年気象図(名寄アメダス)

## 2 作柄の概況

令和7年産の北海道米の作柄は、北海道農政事務所公表（令和7年11月18日）によると、全道の10a当たり平均収量は549kg（ふるい目1.90mm）、作況単収指数98となり、もち米団地の作付け割合の多い地域はいずれも100を下回った。（I 令和7年の水稲（うるち米）の生育経過4ページの図1参照のこと）。

品質面では、農林水産省公表「米の農産物検査結果（令和7年11月30日現在）」による水稲もち玄米の一等米率は97.7%であった（図2）。また、ホクレン仕分け集荷による一等米出荷率は99.9%（令和7年12月19日現在）と高い水準で推移している。

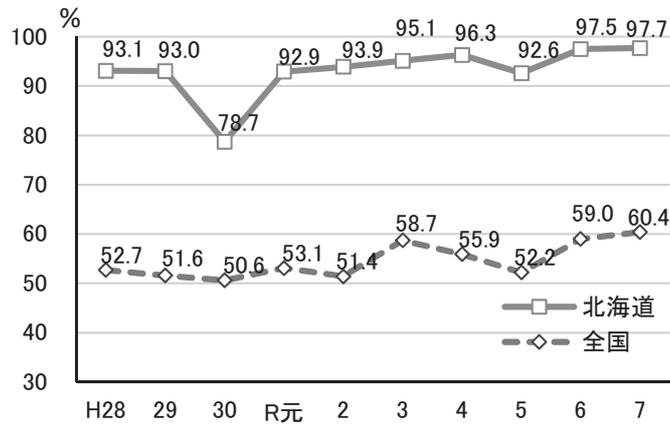


図2 水稲（もち米）の一等米率の推移（北海道と全国）

（農林水産省公表「米の農産物検査結果」の公表値より道技術普及課が作図）

（R7の数値は令和7年11月30日現在の公表値）

## 3 令和7年産米の特徴

### (1) 融雪期から本田耕起

令和7年の根雪終日は、上川（旭川）が4月4日（平年対比早3）、留萌3月28日（早3）、オホーツク（網走）が4月1日（±0）となり、平年並～やや早くなった。4月中旬に断続的な降雨があったため、耕起作業は平年より2～4日遅くなった（表1）。

表1 令和7年水稲（もち米）生育期節・農作業期節（令和7年農政部農作物生育状況調査より）

振興局	作付面積 (ha)	作業期節				生育期節						
		は種期	耕起盛期	移植期	収穫期	出芽期	活着期	分けつ始	幼穂形成期	止葉期	出穂期	成熟期
上川(名寄)	3,690	±0	▲2	▲1	+10	±0	±0	▲2	+4	+4	+5	+8
留萌	704	▲3	▲4	▲2	+7	▲6	±0	+1	+3	+4	+6	+14
オホーツク	797	±0	▲2	▲1	+12	▲1	▲1	±0	+2	+3	+7	+9
平均		4/22	5/4	5/23	9/14	4/28	5/29	6/9	6/25	7/10	7/20	9/4
		▲1	▲2	±0	+10	▲1	±0	▲1	+3	+4	+5	+10

※平年に対する遅速を示す +は早い、▲は遅い

## (2) 育苗期から移植期

は種期は4月22日（遅1）、出芽期は4月28日（遅1）でいずれも平年並となったが、は種時期に低温となった地域では、出芽に時間を要したほ場が散見された（表1）。

5月4半旬までは好天で推移したため、移植時の苗質は平年を上回り、一部では徒長傾向にあった。

移植は平年並に始まり、移植期も5月23日（±0）と順調に行われた。

## (3) 活着期から幼穂形成期

5月5半旬、6月1半旬の気温低下により、徒長苗を移植したほ場では植え傷みが発生し、活着や分けつの発生が遅れるほ場が散見された。そのため、分けつの発生は緩慢となり、6月15日現在の㎡当たり茎数は、上川(名寄)で平年比63%、留萌は95%、オホーツクでは89%と平年を下回った（図3）。その後、6月2半旬以降は、好天で推移したことから急激な分けつの発生が見られ、7月1日現在の㎡当たり茎数は上川（名寄）で平年比107%、留萌は104%、オホーツクでは113%となり、平年を上回った。

幼穂形成期は高温で経過した影響により6月25日（早3）となった。

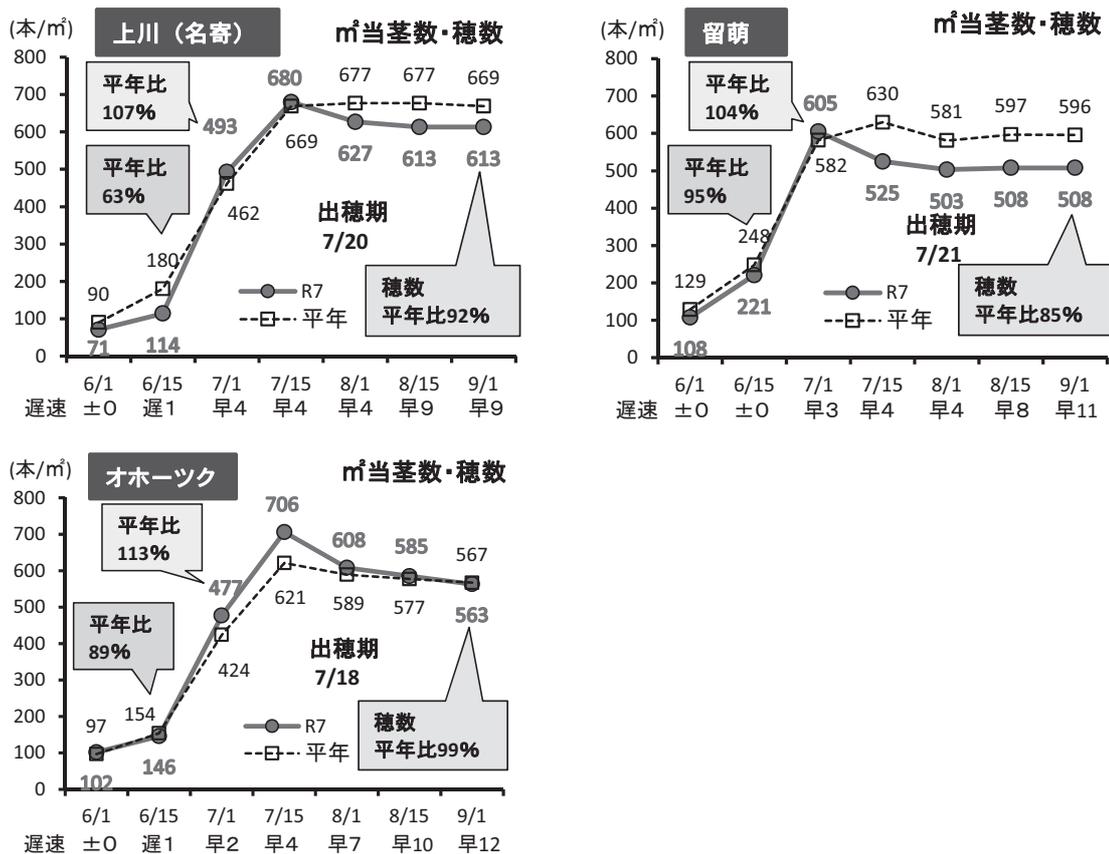


図3 水稻（もち米）の茎数・穂数推移

（左上：上川（名寄）、右上：留萌、左下：オホーツク）

※令和7年農政部農作物生育状況調査より

#### (4) 穂ばらみ期から出穂期

前歴期間及び、冷害危険期は高温で推移し、平均気温は平年以上を確保した（表2）。このため、生育は前進し、出穂期は平年より5日早くなった。莖数は、上川で8月1日以降、留萌では7月15日以降、平年より少ない状態で推移し、成熟期に至った。

前歴期間の日照時間は、上川（名寄）とオホーツクで平年以上を確保した一方、留萌では平年の70%にとどまった。ただし、日照不足による影響は認められず、稔実歩合は平年並を確保した。

表2 令和7年 前歴期間・冷害危険期の平均気温・積算日照時間

	前歴期間		冷害危険期	
	平均気温(°C)	日照時間(hr)	平均気温(°C)	日照時間(hr)
上川	22.7	68.6	22.9	61.7
(名寄)	127%	108%	115%	193%
留萌	22.1	36.4	20.6	79.1
	125%	70%	111%	224%
オホーツク	23.8	65.5	20.6	64.0
	139%	144%	110%	200%

(下段平年比)

※農政部農作物生育状況調査、気象データ：上川が名寄、留萌が遠別、オホーツクが北見のアメダスデータより算出

#### (5) 登熟期から成熟期まで

7月4半旬以降も高温が継続し、登熟期間の積算温度および、積算日照時間はいずれも確保された。そのため、登熟は順調に進み、成熟期は各地で平年より8~14日早まり、オホーツクでは8月中旬に成熟期を迎えた（表1、3）。一方、8月中旬からの断続的な降雨により倒伏が発生し、その後も風雨の度に倒伏面積が拡大した。

表3 登熟期間の気温・日照時間の令和7年と平年の比較

	出穂期 (月/日)	成熟期 (月/日)	登熟日数 (日)	登熟期間積算温度 (°C)	出穂後40日間積算温度 (°C)	登熟期間積算日照 (hr)	登熟期間一日当り日照時間 (hr)
上川	<b>7/20</b>	<b>9/6</b>	<b>48</b>	<b>1,071</b>	<b>909</b>	<b>221</b>	<b>4.60</b>
(名寄)	7/25	9/14	51	981	796	236	4.62
留萌	<b>7/21</b>	<b>9/4</b>	<b>45</b>	<b>1,029</b>	<b>924</b>	<b>269</b>	<b>5.98</b>
	7/27	9/18	53	1,030	803	306	5.78
オホーツク	<b>7/18</b>	<b>8/28</b>	<b>41</b>	<b>957</b>	<b>938</b>	<b>215</b>	<b>5.25</b>
	7/25	9/11	48	950	806	234	4.87

※生育期節・登熟日数：農政部農作物生育状況調査、気象データ：上川が名寄、留萌が遠別、オホーツクが北見のアメダスデータより算出

収量構成要素・決定要素を見ると、㎡当たり穂数はオホーツクでは平年並であった一方、上川（名寄）および、留萌では少なかった。一穂粒数は、上川（名寄）と留萌が多く、オホーツクは平年並であった。㎡当たり粒数は、上川（名寄）、留萌で平年並、オホーツクはやや少なかった。稔実歩合が平年並だったため、㎡当たり稔実粒数が平年を上回ることはなかったものの、千粒重は平年並からやや重かったことから、稔実粒数の減少分を補った（図4）。

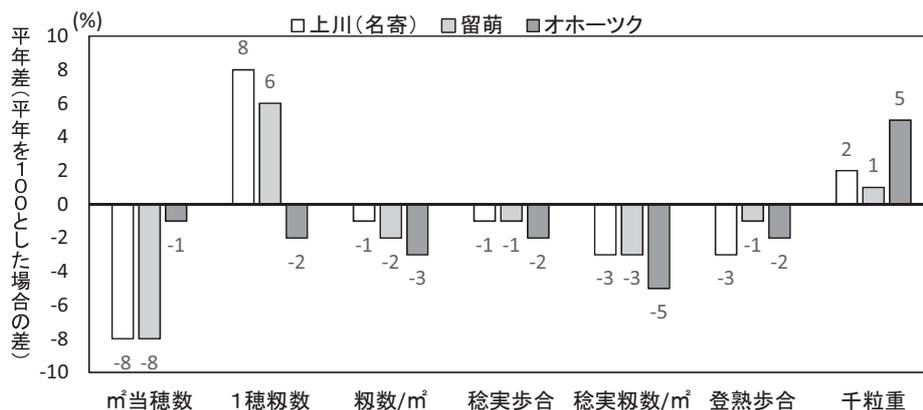


図4 水稻（もち米）の各構成要素の年平均  
(農政部農作物生育状況調査)

## 4 生育の特徴

### (1) 初期茎数の確保不足と高温による生育の早期化

移植時に低温の影響を受けた地域では、初期生育の確保ができず、加えて生育の早期化もあり、m²当たり粒数の確保がやや難しい年となった。6月2半旬以降の高温により一時は平年を上回る茎数になったが、無効分けつとなり穂数確保につながらなかった。

一方出穂期以降は高温対策として入水管理を続けるとともに、登熟後半もまとまった降雨があったことから、土壌水分は十分に確保され、登熟は良好に進んだ。

### (2) 登熟温度、日照を確保

出穂後40日の積算温度は、各地で900℃を超える高温登熟となった(図5)。1日当たりの日照時間も平年以上を確保し、登熟が進んだことから、千粒重が平年並以上に確保された(図6)。

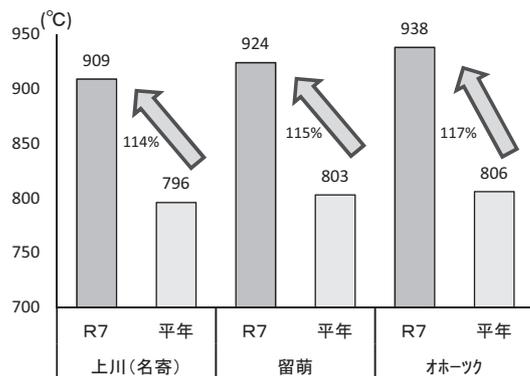


図5 出穂期後40日積算気温  
(令和7年と平年の対比)

※農政部農作物生育状況調査、気象データは上川が名寄、留萌が遠別、オホーツクが北見のアメダスデータより算出

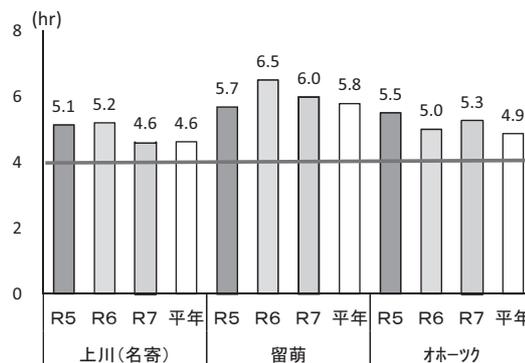


図6 登熟期間の1日当り日照時間  
(令和5～6年、平年との対比)

※農政部農作物生育状況調査、気象データは上川が名寄、留萌が遠別、オホーツクが北見のアメダスデータより算出  
※登熟期間の日照時間が4時間/日以下になると登熟が不良となる(北海道の米づくり(2001年))

## 5 令和8年に向けて

令和7年は令和5、6年に続き高温傾向の中での栽培となった。懸念された高温の影響については、出穂後もほ場の水分保持が実施され、胴割粒の発生等は少なく品質の維持につながった。一方、多くのもち米地域は、栽培環境の厳しい地帯で栽培しており、温暖化が進行しているといえ、6月上旬までは低温に遭遇することが多い。したがって、初期生育の向上はもち米地域の安定生産を図る上での重要な対策である。また、温暖化により多肥栽培でも登熟温度が確保され増収が見込まれる一方、多肥による長稈化と高温経過による節間の伸長により草丈が長くなり、倒伏リスクが高まることを認識しなければならない。

### (1) 初期生育の向上を可能とするほ場づくり

適度な減水深（1.5～2.0cm）を保ち、畦や水尻からの漏水がなく、しっかり止水ができるほ場づくりが必要である。

- ・融雪剤（ケイ酸質資材）散布による早期融雪
- ・溝切りや畦切りによる停滞水の早期排出
- ・心土破碎の施工（前年の秋に施工することも有効）
- ・畦塗りによる畦のかさ上げと漏水対策
- ・ほ場均平（ほ場の凹凸が激しい場合）

### (2) 早期に活着可能な健苗づくり

ほ場に移植しても環境変化に直ちに順応し活着の早い苗づくりを行う。

- ・移植時の草丈が適正（成苗は10～13cm）で葉齢も必要以上に展開させない。  
（移植可能葉齢：成苗ポットは3.6葉～、中苗マットは3.1葉～）
- ・2.5葉期以降に25℃を超えない温度管理を行う（早期異常出穂対策）。
- ・育苗日数は30日程度（成苗ポット、中苗マット共通）とし、移植終わりを5月25日頃を目標とする計画を立てる。

### (3) 移植後の水管理による初期生育向上

- ・移植後はすぐに入水し苗を落ち着かせる。移植直後と低温や強風時はやや深め（苗の半分程度の深さ）とする。
- ・苗が落ち着いた2日目以降は、ヒタヒタ水（1～3cm程度）から浅水（3～4cm）とし、水温・地温の上昇を図り、分けつの発生を促進する。

### (4) 倒伏軽減対策 —最初に窒素施肥量を見直す—

近年は猛暑が続いており、それに伴い倒伏が常態化しつつある。製品歩留まりの良いもち米づくりのため、倒さない米づくりを行う。

- ・毎年倒伏しているほ場は、窒素施肥量の減肥を行う
- ・土壌診断を行い、窒素肥沃度（可給態窒素量）、有機物の施用、乾土効果の有無に応じ適切な施肥量を決定する（北海道施肥ガイド2020を参考とする）。
- ・ケイ酸資材の補給（融雪促進と兼ねるのが一般的）により稲体の健全化を図る
- ・中干しにより田面の引き締めを行い倒伏防止効果を高める。